■獣人鉄道

■1　山之江線各停７３７号

列車の音は、いつも私を、無意識の世界へ導く。眠ってはならないと思いながらも、つい目の前の現実世界を、あやふやな混沌の闇に落としてしまう。

文庫本を読んでいる女学生も、やたらと荷物の多いビジネスマンも、団地の隙間の桜の木々も、すべてが単なる背景画に色あせる。

「目覚めていろ」と、私は無理に目をこじ開ける。

待ち合わせの時間に間に合うか、私は気が気ではなかった。小学校以来の友人、山品隆との旅行の約束。その特急の発車時刻が迫っていた。乗り慣れていない路線の各停列車。気を抜いて眠ってしまえば、乗り過ごすことは間違いない。事故があったらしく、この各駅停車の運行も遅れ気味だ。意識をしっかり保たねばならない。

だが、眠りたくない理由は「乗り過ごし」だけではなかった。私は、眠ってしまう事自体を恐れていた。眠りは、あの嫌な「悪夢」を思い出させるからだ。

幼少の頃、私は電車の中で、異常な体験をした。眠ってしまえば、その恐怖の記憶の封印が解かれる気がして恐ろしい。だから電車の中では眠りたくなかったのだ。

異常な体験とは、幼い日、まさに列車の中、私がいた孤児院から、ある治療施設へ移動する途中で起きた出来事である。孤児院の、私に一番優しかった女の先生が、戦慄の表情をして私を見ている。そんなシーンから記憶は始まっていた。

この記憶が蘇るたびに、私は悪夢にうなされ、全身にびっしょりと汗をかいて、息も絶え絶えに目が覚めるのだった。

私は孤児院では、手が付けられないほど暴れまわる、手のかかる子供だった。生まれながらの特異体質で、精神の暴走が起こりやすい、脳や精神の病気だったのだ。一度暴走が始まると、暴力を自分の意志で止めることすらできない。誰かが力ずくで体を拘束し、落ち着くまで個室に入れておくしかない。その体質は、孤児院では「獣人病」と呼ばれていたほどだった。

幼き日の列車旅行は、その獣人体質を抑制させる、入院治療のための移動だった。だが、私の突発的な暴虐性は、その移動中の列車の中でこそ起きてしまった。

かみつく。ひっかく。体当たりをする。手近な荷物を振り回し、身近な乗客に片っ端からぶつけ、けがをさせる。

列車の窓ガラスを割り、割れたガラスを見知らぬ乗客にまで見境いなく投げつけた。

赤い血の記憶。

異常な精神によってリミッターを外された筋肉は、子供とは思えないほどの強い力を発揮し、同乗していた孤児院の女性職員では抑えきれず、列車内をところ狭しと逃げ回ったという。

私が、走る列車から飛び降りようとしたことから、近くにいた屈強な若者数人が一斉に私を押さえつけて、事件は終わったらしい。

押さえつけられる途中にも、あらゆる乗客に暴力を働いて大勢の人間を傷つけた記憶だけはある。

もう、その事件の細部は明確ではないが、割られた窓から、列車の轟音とともに、すさまじい風が、列車内に吹き込んでいた事だけは良く覚えている。

「まさに獣人だな」と、私は思う。

その列車移動の後、入院した治療施設での薬物療法で、私の精神の暴走はほどなく止まった。以来、なんとかごく普通の社会人として生きてきたが、この事件の記憶だけは、私の心の大きなトラウマとして精神の闇の中にどっしりと居座っていた。

だから、その記憶を思い出したくはなかったのだ。

精神の暴走は、いつ再発してしまうかも知れず、再発すれば、自分の意識そのものが希薄になって、どんな非道な行為を行っていたかも正確には覚えていられないのだ。

自分の内面の暴虐性に恐れおののきながらも、なんとか平常の生活を過ごすことが出来ている。この他人から見れば当たり前でささやかな安心感が、私にとってどれほどありがたく、幸せをもたらしてくれるものであるか。「獣人」としての記憶を持たない一般人には決して理解はできないだろう。

もし、精神の暴走が起これば、無意識のうちに暴れ回り、気がついた時

には警察で拘留され、「いったい私は、何をしたんだ？」と私自身、驚くことになるだろう。
あの治療院から出て以来、精神の暴走の気配もなく、警察で意識を取り戻した、という経験もない。もう、二度と、あんな恐怖は味わいたくないのだ。
だが、列車の振動は、いつもあのおぞましい事件を思い起こさせ、恐怖に歪んだ孤児院の女性職員の表情を再生させる。
だから私にとって列車の揺れるリズムは、心地よい眠りを誘う睡眠薬であるとともに、精神の暴走がもたらす厄災への恐怖のはじまりでもあった。
私は、いつか獣人に戻ってしまうのではないか？　治療が成功したいまでも、電車に揺られるたびに、そんな恐怖が私を襲う。無意識と覚醒のはざまで、私はいい知れない不安と恐怖にさいなまれるのだった。
「考えすぎだな」
私はわざと小さくつぶやいて、自分を落ち着かせる。あの事件から三十三年。一度として精神の暴走が再発したことはないのだ。
「大丈夫。まったく問題ありませんよ」
数年ごとに行われる定期検査でも脳内代謝物の異常は認められていない。私は大人になって、幼児期の暴虐性から卒業したのである。もう、心配することはない。
ちょうどその時、車内アナウンスで、私が乗る特急の路線も、遅れを来しているという案内があった。良かった。もう、あわてる必要はない。
「そうさ、ゆっくり眠っても大丈夫だ」
自分に言い聞かせて、あと7駅ある列車の運行時間を、睡眠にあてることにした。

■2　本状線乗換駅「山田」

「よぉ、間違えずに来れたか」
声をかけてきたのは、小学校からの友人の山品隆だった。
「俺たちが乗る特急、最低でも一時間は遅れるらしいぞ。そこの喫茶店でお茶でも飲んでいくか？」
運行の遅れは、全線におよんでいた。駅構内にあるカフェで時間つぶし

でもするしかなかった。
山品とは小学校から中学校の一年まで同じ学校に通った。中学の途中で山品が別の町に引っ越した事が、逆に定期的な連絡を取り合うきっかけとなって、高校、大学を通じて数年に一度、お互いの近況を報告しあう間柄である。
お互いの子供の頃からの蛮行や悪行、あるいはそうせざるを得ない事情にいたるまでを知り尽くした間柄だった。
「仕事の方はどうなんだ？」私が聞くと、
「まじめに仕事をすると、うまく儲からんなぁ。はははは」と笑って山品は返事をした。
山品は一時期、違法な薬剤の海外取引を、法律違反すれすれの危険な手法で行っていた。
私は、幼い頃からの彼の赤貧ぶりと、なんとしてでも病気がちな母を楽にしてやりたいと考えていた彼の心情を知っており、その行為を批判はしなかった。
だが、危ない橋を渡って、彼が犯罪者になってしまうことだけはなんとか食い止めてやりたかった。山品はヤクザまがいの集団ともつきあいがあり、いつ、彼らのような本物の犯罪者集団によって、罪をなすりつけられるかもわからない状況だったからだ。
「ゆっくりでいいから、なんとか足を洗えよ」と長々と説得を続け、やっと山品は、いまの日用雑貨貿易での生活へ、転身を果たしたのである。
「そうか。まぁ儲からなくても、平和なのはいいもんだぞ」
私は喫茶店のドアを開けながら、山品の顔を見る。あのいつも血走った目で話をしていた山品が、いまは心から落ち着いて話をしている。この、安心してお茶を飲める平和を、私は心から喜んでいた。
今回は、そんな彼の転身成功の祝いを兼ねた、２年ぶりの「会合」だった。
そして、それは私の三十六にして、はじめての結婚を祝うための会合でもあり、今回は二人で旅行する、という今までにない新たな趣向も盛り込まれている。
お互いの住所も考慮すると、この乗り換え駅の改札内での待ち合わせが最適だった。
「先に渡しておくよ」と、目的地のヨスガ温泉行きの切符を山品から受け

取る。
「どうだ、結婚生活の方は？　ひとみさんは優しくしてくれるか？」
山品が椅子に腰掛けながら私の生活について聞いてくる。喫茶店内のテレビのニュース番組の音が少しうるさい。
「え？　ああ、いい嫁だ。でも、それ以上言うとノロケと思われるからな。もう言わん」
「ははは。そうか。しかし良かったよ。お前が結婚する気になって。『ジュウジン』の記憶にいつまでも縛られなくてな」
「ああ、さすがに三十六だ。もう獣人になってしまう悪夢からも解放されたよ」
「そうか。前に、うちでお前が飛び起きた時は、何事かと思ったぞ」
「ああ、あの時は二人でかなり飲んだからな。たぶんそのせいだろう」
「『そのせいだろう』じゃないぜ。お前、自分の子供が獣人になったらと、かなり神経質になってたじゃないか。一生独身を貫き通すんじゃないかと、気が気じゃなかったぞ」
「心配させてすまなかったな」
「ふふ。けど、いまじゃ俺の方が独身だ。わからんもんだな」
と、山品は少し寂しそうに答えた。
山品は三度の結婚をみな失敗に終わらせていた。最初の結婚は山品の暴力で妻に逃げられ、二度目の相手は甘やかしすぎて男を作って出ていった。そして本気で愛した三度目の吉乃さんは、病気で死に別れてしまった。
二度の離婚は、自分にも非があっただろうが、心を入れ替え、やっと小さな幸せを得られそうだった時の、吉乃さんの死は私にもあまりに辛かった。
「まだ、再婚する気にはなれんか？」
「ああ。さすがになぁ。喪に服してるというわけでもないが、まだそういう気にはなれん」
「子供がいるわけでもないんだ、がんばれよ」
「そうだな。俺はジュウジンでもないしな」
「ははは。その通りだ」
吉乃さんがなくなった後、あれだけ精神を病んでいた山品が、こうして再婚話も平気で口に出せる様子を見て、ひとまずは良かったと思わずには

いられなかった。思えば、私と山品の関係には不幸な出来事が多すぎたのだ。

山品の事務所に刑事が家宅捜索に踏み込んできたところに居合わせたあの日。

山品の二度目の妻が置き手紙をして出ていった日の夜の山品との「会合」。

辛い出来事があるたびに夜を徹してなぐさめあい、そして、その翌朝に私が獣人の悪夢で飛び起き、その苦しんでいる姿を見る山品。

それらのことが、懐かしい思い出になっている、いまこの時が、いかに幸せであることか。

テレビでは、ここから少し離れた支線で起きた列車事故のニュースを流していた。ああ、これが運行の遅れの原因なのか、と、やっとその時気付く。

そうなのだ。いま、まさに自分たちが無事であることこそが大切で、すぐそばで起きている事故さえ他人事に思えてしまう。それが、いまの私たちなのだ。

「おい、かなりの死者が出たらしいぞ、七人だと言ってる」

山品はテレビのニュースを見て話しをする。しかし、亡くなった人には申し訳ないが、死亡事故の話も結局は他人事だ。

山品が足を洗ったように、私も悪夢からは解放された。

二人ともに、少しずつ一歩ずつ、幸せになってきた。そんな自分たちの人生の方がはるかに大切だったのだ。

「そろそろ発車するんじゃないか？　ホームに急ごう」と山品に促され、私たちは喫茶店を後にした。

■3　ヨスガ温泉行き特急「聖夜（ホーリーナイト）」

ヨスガ温泉行きの特急「聖夜」は、最近ではホーリーナイト号と呼び名も変わり、車両に大きな金属の文字板で、その英語名が貼り付けられていた。高級寝台車両もあるリゾート列車として人気も高い。

車両の中は七割方、席が埋まっていた。混雑でもなく、かといって閑散と言うほどの寂しさでもない。ただ、事故があったせいか、車掌や職員の出入りが多く、ホームでは運行の遅れを知らせる案内や連絡が少しやかま

しい。
「18のAとB…と。ああ、あそこだな」と山品は座席を見つけたる。
電車がゆっくりと動きだし、山品は体のバランスを取るために座席に手をかけながら移動した。
古い車両の内装を今風に改装し、レトロな味を売りにしている「聖夜」は、最新の車両よりは多少揺れが大きい。私も手近な座席の背もたれに手をかけて移動した。
席に座り、買い込んだ弁当を食べようとしたときだった。制服を着た二人の男が、私たちの座席に近づいてきた。
「申し訳ございません。お二人は、タカラベアキラさんと、ヤマシナタカシさんでしょうか？」
車内検札かと思ったが、それならば名前を聞かれることはないだろう。なんだか様子が変だな？　とは思いながら、二人どちらともなく、
「はい、そうですが？」と答えた。
「我々は、鉄道警察隊の者です」
と、やせぎすで生真面目そうな男が制服から出した警察手帳を私たちに見せた。同行している同じ制服の小太りの男も胸からチラリと手帳を見せる。車掌ではない、と言うことだろう。
「さきほど起こりました神崎線の車両脱線事故について、死亡された方の目撃者情報を追いかけておりまして、あなた方お二人のどちらかとすれ違っている可能性があるんです。できましたら、少しお話をうかがいたいのですが」
二人の警官は、少しスピードを上げた電車のゆれを、体でバランスを取ってやりすごしながら説明した。
「神崎線ってテレビでやってた事故ですか？　まぁ、そういう事ならご協力しますが」と答える私。座席の横に警官が二人も立っていると、それだけでも圧迫感があった。
「ありがとうございます。簡単な確認なのですが、死亡者の遺留品の検分もございますので、この列車内にある分駐所の方まで、ご同行願えませんか？」
妙にていねいな口調なのが気にはなったが、警察と名乗られて、あまり多くの客の目につくのも面白くはなかった。
とくに山品は薬剤の売買を行っていた当時警察に何度も疑われた経験が

ある。そう気持ちの良いものでもないはずだ。
長い獣人化への恐怖をやっと克服して結婚した私。そしてやっと警察沙汰の恐怖から逃れられた山品。二人とも、これからが第二の人生の開幕なのだ。その祝いの旅行で、変なケチをつけたくはなかった。
しかし山品は、「いいですよ。行きましょう」と、昔とはまったく違う明るいハキハキとした声で答えた。
ああ、そうか、もう、あの頃とは違うのだと、私は思いなおした。
「うん、じゃ、その遺留品というのを見に行こうか」と二人で席を後にする。そうさ、もう、あの頃とは違うのだ。誰に後ろ指を指されることもない。
立ち上がった途端に列車はトンネルに入り、車内放送が、「ただいま桶座浜トンネルを通過いたしております。お手元にご注意ください」と案内をはじめた。

■4　特急聖夜内鉄道警察隊分駐所「弾丸」

山品と私は、特急聖夜の最後尾へと連れて行かれた。二人の警官は、車掌のいる後尾の運転席の中に入ったかと思うと、そのまた奥にある連結部ドアに手をかけた。
「え？　まだ奥があるのか？」と私は不思議に思う。
連結部のドアには鍵がかかっており、警察隊の小太りの方が鍵束を出して、連結部ドアを開けた。列車の車掌がその様子を見て、軽く会釈をした。
二人の警官に促されたので、山品とともに、警官より先にドアをくぐる。
驚いたことに、そこには、もう一両車両がつながれており、その一両がまるまる、警察の事務所になっているのだった。
「なんだ、これは？」
山品と私は、ただ驚くばかりだった。手前に面談を行うための、テーブルと椅子が2セットあり、その奥には二人の警官のための事務机らしきもの、そしてその奥は寝台車を改造した簡易ベッドがあり、宿泊や拘留もできるようだ。まさに小さな警察署である。
我々の後に入ってきた二人の警官は、連結部のドアを閉めると、ドアの

横にぶら下げられていた、螺旋コード付き手持ちマイクで「こちら『弾丸』。十八時十八分、目撃者とともに帰所」と、どこかに連絡をした。
列車は大きなカーブに差し掛かり、きしみを上げて、車両がいななく。私と山品は少しよろめき、面談テーブルの椅子で体を支えた。
「ああ、お気をつけて。テーブルは署の備品でね。固定も素人仕事だ。がたつくかもしれませんが、どうぞ、そこにおかけください」
やせぎすの警官が親切めかして言ったが、表情は妙に冷たい。
陽も沈み、あたりももう暗い。外の風景も、そこがどんな場所か、よくわからなくなってきていた。
車内放送が、今度は何故か女性の声で「路線柵の杭抜き工事遅延のため運行が遅れております。申し訳ございません」と告げた。
「遅れますか」と痩せぎすが車内放送に答えて、独り言のようにポツリと言う。
「それで、死亡者の方というのは、どんな？」
山品は、座席に腰掛けながら、単刀直入に話を始めようとした。やせぎすは、一呼吸置いて、「そのお話をする前に」ともったいぶった言い方で、山品の質問をさえぎる。
「先に、『遺留品』の確認をお願いできませんかな？」と疑り深そうな目で問いかけて来た。
昔、山品の事務所に押しかけてきた刑事の目と同じ意地の悪さがある。
「こちらがその遺留品でしてね」と、小太りの方の警官が、ポケットから小さなビニール袋を取り出す。中には何錠かの白い小さな薬が入っていた。
私はその薬を見て、一瞬ドキリとした。幼い頃、そして小学校に上がってしばらく、飲み続けていた獣人症を抑制する薬とそっくりだったのだ。
少し大きめの錠剤は、片面に割線が十字に入り、反対側には彫り込んだようにTの文字がある。子供の頃、毎日のように飲んだ薬は忘れようがない。おそらく錠剤を見て息をのんだ様子は、やせぎすにも分かっただろう。
しかし、驚いたのは、山品も目を見開き驚愕の表情をしていた事だった。もしかすると、密売で取り扱っていた薬剤の中に同じような外見の薬があったのかもしれない。
「いかがですかな？　見覚えはありませんか？」やせぎすは、重ねて聞い

てきたが、その問いかける表情は、先ほどとは大きく違って、妙に冷静な顔つきになっていた。

車両が踏み切りに差し掛かり、車輪の轟音に紛れて、小さく警報の鐘の音が響く。

チン、チン、チン、チン、チィ…。

音が遠くに去った時、私は気を取り直してやせぎすに言う。

「これは、僕が子供のころ、飲んでいた薬とかなり似ています。そっくりですね。ずいぶん久しぶりに見たので、ちょっと驚きましたが、もう三十年くらい前の話です。今回の死亡者の方とは関係ないでしょう」

もう獣人症状は出ないとはいえ、思い出しただけで、体はこわばり、嫌な汗が腋を湿らせる。表情もつい硬くなっていることだろう。

「そうですか。なるほど」とやせぎすは、私の顔を興味深げに観察していた。そして「ヤマシナさんの方はいかがですか？」と、今度は山品の顔をじっと観察をはじめた。

山品は、錠剤から目をそらすと、ただ一言、「見覚えはありませんね」とだけ言った。表情はかなり硬い。

列車はまた踏切に差し掛かり、警笛の音が近づいては去っていく。

「そうですか。わかりました」やせぎすは、急に姿勢を正してまた生真面目な態度に戻って話し始めた。

「実は、あなたがたには、神崎線の車両脱線事故についての重要情報を、お伝えしなければなりません」と、一息に言って、「神崎線事故は、脱線事故ではないんですよ」と意外な事を話し始めた。

「まだ情報は収集中ですが、脱線は結果であって事故の起点ではない。発端は車内での無差別殺人です。列車車内で運転士を含め九人の犠牲者が出た意図的な暴力事件というのが、いま我々が知る最新の情報です。ガラスを破って犯人が運転席に乱入、運転士の死亡によって列車は脱線。犯人はまだ逃走中です」

列車内の暴力騒動。それは私の遠い記憶を再現したかのようで、私は思わず体が震えた。

「これ以上は捜査上の秘密という事でお話しするのはご勘弁願わないとなりませんが、上の方からもいろいろ指示が出ておるんです。誠に申し訳ないですが、もう少し細かい話をお聞かせいただく事になるかも知れません」

やせぎすは、事情聴取がしばらく続く事を遠回しに伝えてきた。
「なんだって？　こっちは温泉でのんびりするために乗ってるんだ。こんなところで引き留められたらたまったもんじゃない」とすかさず山品が言う。
「ご心配なく。ここから出ても、同じ列車内、座席に戻られるだけでしょう？　到着時刻は変わりませんよ。しばらくおつきあい願えませんか？」
やせぎすは最初から練習してきたかのように切り返した。
女性のアナウンスがふたたび運行の遅れを詫びていた。

■５　第４２５１事案事情聴取

やせぎすの話は、いつまでたっても終わらなかった。調書を作ると言っては、手を休め、世間話をしているかと思えば、また事件の真相に関わるかのような話をほのめかす。
かと思えば、調書の書き込みが、数項目進むたびに、小太りの男、（田所と名乗った）が、例の車内マイクでどこかに報告をしている様子だった。
車内放送はより一層頻繁になり、男の声で「神崎線脱線事故の被害者救出のため、レスキュー隊が発進した」という情報が流れ、女の声で繰り返し、運行の遅延報告が続いた。まるで競い合うかのようだった。
しかし、そんな事にはまるで頓着せずにやせぎすはゆっくりと調書作成にとりかかっていた。
「そうすると、タカラベというのは、財部と書くのですか。めずらしいお名前ですなぁ」
いったい調書を作るのに、どれだけの時間がかかると言うのだろうか。目撃者情報の聴取といいながら、私たちがどこで何を見たかを質問しては来ないのだった。
私は、だんだんと、この取り調べが「目撃者聴取」ではなく「重要参考人聴取」なのではないか？　という疑いへと進化し、それはほぼ確信へと変わっていた。
大げさな車両型の駐在所。
頻繁に調書内容を報告する警官。
そして所内に「拘留」するためかのようなのらりくらりとした質問。私

たちはすでに「捕まって」しまったのではないか？
「柳澤さん、でしたね」と、私は意を決してやせぎすの警官に質問することにした。
「そうですが、何か？」
「どう考えても我々の取り扱いは、目撃者への聴取の範囲を超えていると思うのですよ。もしかして、重要参考人とか、あるいは、その虐殺事件の容疑者として我々はこの特別車両に拘束されている、と言うことではないのですか？」
私は、もしかすると、私の過去の事件をもとに犯人と疑われているのではないかと気が気ではなかった。
「山品は本状線から、私は山之江線から山田駅へとやってきたんです。神崎線とは方向がまったく違う。仮に神崎線で事件が起きたとしても、事故駅の与志山から山田駅まで、あの時間で移動できるはずがない。私たちは二人ともに無関係でしょう」
私は息せき切って、一気にまくしたてた。妙な間が少しあって、やせぎすの男、柳澤巡査は、こう言った。
「…。興奮されないでください。財部（たからべ）さん。もちろん、あなたは単なる目撃証人です」
そう言って私を落ち着けてから、柳澤は一呼吸置いて続けた。
「ただ、この手の事案は、我々のような下っ端は、上の命令に従うしかないんです。あなたには何も言えないが、命令されたことは遂行しなければならんのです。そうお考えください」
「どういう事ですか、それは。何かの嫌疑をかけられているって事じゃないですか。僕らは関係ないですよ。何日も前から切符だって押さえてたんだ。調べてくれてもいい」
「財部（たからべ）！　それ以上言うな。下手な事を言うと証拠として調書に残されるぞ」と山品は急に私の発言をさえぎった。
「どういうことだ？」と問おうとして山品の顔を見ると「しゃべるな」と言うように首を小さく横に振る。
冤罪で警察に拘束された事もある山品だ。罪をなすりつけられる場合の手口にも詳しい。今は黙っておくほうが得策と踏んだのだろう。
その時、また車内放送が始まった。今度は女の声だ。
「路線柵引き抜き工事終了しました。４２５１事案ただいまより第二段階

情報開示可能です」
　案内を聞いて、柳澤は急に表情を変え、私たちに向き直った。
「お二方にはお引き止めして申し訳ありませんでした。やっといま、令状が降りたようです。事情説明に入らせていただきます」と、急に官僚的な事務口調で話し始めた。
「神崎線の事故は、前々から捜査が進展しておりました、一種のテロ事件という見方が取られておりまして、あなたがたは、その事件、４２５１事案と我々は呼んでおりますが、その重要参考人として身柄拘束の命がくだっております。あなた方お二人には基本的人権は確保されております。どうか、冷静に状況をご理解ください」
　やはりそうだった。いつの間にか私たち二人は犯罪者扱いにされていたのだ。嫌な予感は、いつも的中する。
「どういう事なんですか。説明してください」そう問いかけるのが精一杯だった。
「詳しい話はできませんが、お二人のうち、お一人は、この神崎線殺戮事件の犯人ないしは共謀者として逮捕状が出ている、ということです。二十一時三十八分、ただいまより、この分駐所は、犯人護送列車に変わります。いまから五十四分後にヨスガ線桜里坂駅に臨時停車し、そこで逮捕令状を受け取ります。それまでは申し訳ありませんが、お二人とも事件関係者として、この『弾丸』にご在席願います。お二人のうちどちらかは、神崎線の脱線車両から逃走した犯人という可能性がもっとも高いという連絡を我々は受けております。犯人ではないとおっしゃりたいのはお察しします、事実がどうであるのかを確認するのが我々の仕事です。ご協力いただけませんと、疑惑を晴らす事自体がより難しくなってしまうと、お考えください」
　話を聞いて、私は呆然とした。
「逃走した犯人という可能性がもっとも高い」だと？　どういう事だ？　私が殺戮事件の犯人と疑われているのか？　そんな馬鹿な。事件が起きた時、私は山之江線に乗っていたのだ。神崎線まで行けたはずがない。いや、それとも、あの車内でのまどろみの間に夢遊病者のように移動して事件を起こしたとでも言うのか？　いや、それはあり得ない。私はちゃんと山田駅までに目を覚ましたではないか。
　では、もしかして山品がテロ組織に関わっているとでも言うのか？

一瞬、「山品が犯人なら自分は助かる」という悪魔のような囁きが私の胸を去来した。

いや、そんなはずはない。この十年間、どれだけ山品が裏の社会から時間をかけて足を洗ってきたのかを、私こそが一番良く知っているではないか。

自分のあまりの身勝手さに、自己嫌悪が走る。そこまで私は自分の身が可愛いのか。なんと言う事だ。

それでも、冷静に考えれば、警察に狙われるとすれば山品の方でしかないという事に気付いて私は逆に事態の深刻さにぞっとしたのだった。山品は、何度も警察で密輸犯人として事情聴取をされてはギリギリ逮捕されずに来たのだ。警察にだって当時の資料は残っているだろう。

だから、二人のどちらかが犯人だと警察が言うなら、それは山品だと言う意味になる。しかし、私には、今回の山品への疑いがまったくの濡れ衣なのだということだけは確信的にわかっていた。あれだけ平和な暮らしを渇望し、それを何年もかけて手に入れた山品が、そんな殺戮事件を起こしてしまうというのは、どう考えても理屈に合わないのだ。

であるなら、この状況は何だ？

考えられる事はただひとつ、「用意された冤罪」だ。誰かの怨恨か？

それとも山品が足抜けしたグループからの罪のなすりつけなのか？

いや、なすりつけてきた相手が誰であれ、私が証人となって、山品がどれだけ平和な暮らしを築くために苦労してきたのか、その証明をしてやらねばならない。

危ない仕事仲間と距離を置いてきた山品には、味方になってやれるのは私くらいのものなのだ。疑いを晴らしてやるためにも、この数年の苦労を、私が具体的にキチンと訴えなければ先入観で見られかねない。

と、その思いを口にしようとした時だった。

「二人とも拘束って言うのは、どういう訳です？　話がおかしいじゃないですか。犯人は一人なんでしょ？」といままで黙っていた山品が口を開いた。口調はかなりきつい。こういう場面での対応に山品は慣れていると言う事なのだろう。

「確かにおっしゃる通り」とやせぎすの柳澤は説明をはじめた。

「ただ、この事案、公安もからんでましてね、我々だけではどうにもならんのです。すでに捜査上の秘密をお二人にお知らせしてしまっております

ので、いまここで無関係な方を解放するわけにもいきません。逮捕状の出ていない方にも、次の桜里坂で守秘宣誓書にサインをいただかないといけませんし。ですから、誠に申し訳ないんですが、お二人ご一緒に、しばらくおつきあい願えませんか。とにかく我々下の者に決定権はないんですよ。ご理解ください」

その立て板に水とも言える説明を聞いて山品は「チッ」と舌打ちをして黙った。

私はたまらず、思いを口にする。

「どちらかが犯人なんて事はありえないですよ。僕はもちろん、こいつだって、この何年、どれだけ普通の幸せを掴むために苦労してきたことか！」

そう声を荒げてまくしたてると、横から山品は私の腕を押さえて、「もう言うな。網が、大きすぎるんだ」とだけ小さな声で言い、そしてため息とともに肩を落とした。

そして、そのひとことで、私にはすべてが分かってしまった。その昔、あらぬ疑いをかけられて警察から戻ってきたとき、山品はいつも「網が小さくて助かった」と口癖のように言っていたからだ。

罪のなすりつけと言っても、チンピラ個人が偽証をする程度のものから、担当の警官と犯罪者グループがつるんでいる場合、あるいは警察署の署長レベルと広域暴力団のつながりなど、「網」の大きさは千差万別なのだという。

山品のバックにいたのは、それなりに影響力のある大きな裏組織であり、その力のおかげで助かった事も一度や二度ではなかったのだ。しかし、いまは、もうその後ろ盾はない。その上、どうやら「網」自体が、かなり大きい、ということらしい。

山品の表情は「してやられた」という悔しさと情けなさでいっぱいだった。事態は私が想像していた以上に深刻になっていたのだった。

■6　桜里坂駅二番線ホーム上郵便支局

桜里坂駅は、ヨスガ線と地方の支線である天昇線との分岐駅であり、ホームも一番線と二番線の二つしかない小さな駅だった。

すでにあたりは暗く、駅舎から漏れる光が妙にまぶしい。窓からは良く

は見えないが、あたりは一面の畑であるようで、人の気配すらない。
特急「聖夜」は、ここに臨時停車し、我々が捕らわれている分駐所「弾丸」は「聖夜」から切り離された。すでに「聖夜」はヨスガ温泉に向かって発車してしまった。残されたのは我々だけだった。
あの「工事終了」のアナウンスの後、小太りの田所が「ここからは携帯電話もこちらで預からせていただきます」と、我々の携帯電話まで取り上げてしまった。荷物もすでに、田所の手元にあった。打つ術なしという状態だ。
「駅に郵便局の支局がありましてね。そちらに書状が届いているはずです。では受け取りに参りましょうか」と柳澤と田所は私たち二人に手錠をかけ、「弾丸」に入って来た時とは反対側の連結部に向かった。
通路の突き当たり、連結部の扉を開けると、その先に車両はなく、いきなり満天の星空が広がっていた。人里離れた片田舎の小さな駅。列車の最後部に出た形だった。
連結部ドアのわずかなせり出し部から、ホームに向けて、備え付けの細い橋が渡されている。その上を私たちはヨロヨロ連行されて行く。石造りの、狭いホームに降り立つ。
山品はさっき「大きな網」の話をしてからは一言も言葉を発していなかった。顔面は蒼白だ。その横顔に諦めと大きな悲しみが宿っているのを私は見逃さなかった。
山品はすでに、自分が逮捕されると確信しているようだ。どんな網が彼を捕らえてしまったのか。私には知りようもなかった。ただ、この不幸な男を何とか救ってやりたいという想いだけが私の心を満たしていた。
「山品さん。あなたには手紙を書く権利が与えられています。執行されますか？」と柳澤が聞いてきた。
山品は一瞬「え？」と言うような不思議な表情を見せたが、しばらく考えた後「はい」とだけ静かに答えた。
連行される前に、知人に別れの手紙でも書かせるという事なのだろうか？　私自身、今後は山品と会って話せる機会も、そうはやってこないのかも知れない。そう思うと、なんとか助けてやる方法はないか？　と気だけが焦った。
よく見れば、ホームの端に大きな桜の木があり、桜吹雪の中に小さな灯りが見える。ホームより一段低くなったあたりに郵便局の局舎が見えた。

その灯りがちらちらと桜吹雪にゆれていた。
　その郵便局は田舎の重要拠点として、駅の中からも外からも利用できるように作られていた。局舎から低い柵がホームへと続き、駅構内と一般道を区分けしていた。簡単に越えられそうな低い柵だ。
「では行きますか」と柳澤が山品を連れて桜の木の向こうへ行こうとした。その時、私はふと思いついた。
「いま、ここなら闇に紛れて逃亡できる」と。
　私の足は遅いが、山品は速い。足の速さは、昔から彼の自慢なのだ。
　あの柵さえ越えれば、田畑はすぐ隣だ。その先は本当に真の闇なのだ。山でも谷でも隠れる場所はどこにでもある。チャンスは今しかない。そう思った途端に、私は体が自然に動いた。
　柳澤巡査に飛びかかり、「いまだ！逃げろぉぉぉ！」と大声で叫ぶ。
　柳澤巡査は、あわてて警棒を取り出し、力の限り私の手の甲を打ちつけた。しかし私は痛みを必死でこらえて手をはなさず、逆により深く柳澤の体に食らいつくと、横腹にかみついた。「ぐわ」と柳澤が叫び、警棒は私の背中に容赦なく打ち付けられた。少し離れた場所にいた田所巡査も大あわてでやってきた。
「いいんだ！　財部（たからべ）！　やめろ！　もういい」という山品の声で、やっと私は正気に戻った。
「そんなこと、しなくてもいいんだよ。俺はなんとかする。気にするな」
　山品はまるで悟ったかのような表情で私を見ていた。
　夜に紛れて、桜の花びらが山品の顔の前を通り過ぎた。それは雪のようにも見える。
　ああ、こいつは運命を受け入れたんだな。
　私はただ、そう感じて、たまらない悲しさに浸された。
「はぁっ。はぁっ。なんて奴だ。無茶するんじゃないよ」
　柳澤は、逃げようとしない山品の態度に、少し安心して、息を切らしながら一言文句を言っただけだった。気を取り直して、ふたたび山品を郵便局の方へと引き連れて行く。私は田所巡査にきつく後ろ手に縛られ、その場で待たされることになった。
　天昇線から小さな古い一両の列車がやってきて、「弾丸」の前につながれる。これからどこかに移動するのだろうか。山品の運命はどうなるのだろうか？

しばらくの時間をおいて、郵便局から山品と柳澤巡査が戻ってきた。柳澤巡査の手には大きな封筒があった。柳澤は、山品を田所に引き渡すと、その封筒を開け、中から書類を出した。

「では、読み上げますので、心してお聞きくださいよ」と書類を灯りのある方に向けて内容を確かめる。

すると、驚いたような表情をしたあと、こう言った。

「神崎線連続殺人事件容疑者として、財部明（たからべあきら）を逮捕する」

私は、自分の身に起きた事が理解できなかった。

ただ、山品の驚いた表情を見て、彼は私よりもっと驚いているのではないか？　という場違いな想像をしていた。

※　※　※

そこから後の事は、良く覚えていない。ただ呆然としたまま、ふたたび弾丸に乗せられて、寝台に鉄柵をつけて牢屋に改造したベッドに押し入れられた。そして、寝台の窓から、ただぼうっと風景を見ていただけだった。すでに「弾丸」は、次の目的地へと向かっていた。

山品の荷物と携帯は、桜里坂駅で手紙とともに自宅に郵送された。山品は容疑者ではないが、私という容疑者との同行者であり、証拠隠滅を図らないように、荷物は警察経由で別便で送られると言うことだった。その郵送手続きがあるから、彼にだけ手紙を書く事が付帯権利として許されていたに過ぎなかった。

窓の外の闇を眺めていると、時折過ぎ去る街の灯りで窓ガラスに書かれた裏文字が浮かび上がる。

あかね

あかね？　誰だった？　ああ、お義姉（ねえ）さんのことか。妻、ひとみの実の姉だ。理解するのに時間がかかる。頭の回転が遅い。

この文字は「弾丸」が桜里坂駅を出る時に、山品が外から書いたものだ。「弾丸」の窓は護送用なのか、二重になっていて、外の声も聞こえない。

山品が自分自身を指さし、窓の外で必死に何かを繰り返し叫んでいたのを思い出す。そして、この「あかね」という文字を、何かを伝えようとして書いていた。何を言いたかったのだろう？

ふと、山品の叫んでいた口の動きが「俺がお前を助ける」という意味だったのではないかと気付いた。ああ、そうか、あかねさんは警察勤務だったな。何か情報でももらおうということか。

しかし、山品自身があれだけ諦めていた「網」の大きさだ。どんな手を使えば助かると言うのだ。望みはあまりない。ただ、必死の形相の山品の気持ちがありがたく、ほんの少しホッとした気分になった。そして、その途端、猛烈な睡魔が私を襲い、混沌の中へと落ちていった。

■7　天昇線地下操車場内拘置所六号房

天昇線の終着駅は、地方都市天山市の南東にあり、天山市内の地下鉄と私鉄長距離線との乗り入れの起点駅であった。

その地下駅にある車両の引き込み線に、「弾丸」は入庫され、地下道内の拘置所に私は拘留されていた。

本来はトンネル内の作業用具の保管庫として使っていた空間なのだろう。風通しは悪く、カビ臭い部屋だった。その中に鉄格子を備え付けて牢屋がしつらえてある。

夕食には粗末な乾いたパンと牛乳が出された。食欲はなかったが、これから押しつけられるであろう、冤罪の取り調べに対抗するためにと、無理矢理口にほおりこんだ。そして、私は、ただ牢屋のベッドで、座り込んで時を待っていた。

いまごろ、妻は、ひとみはどうしているだろう。心配してはいないだろうか？　いや、山品との旅行は二泊三日の予定。まだ彼女は、自分の夫が、こんな目に遭っているということにすら気付いていないだろう。

解放された山品にしても、終電も出た後の桜里坂駅では一泊するしかなく、その後も自宅までは警護が付くという話だった。しばらくは誰にも連絡をさせないつもりなのだろう。かなり入念な逮捕作戦だ。いったいどういう裏があるというのだ？

何より、私はこれからどうなるのだろう。弁護士は付くのか？　そして、どう守ってくれるのか？　裁判ではどんな形で私を犯人扱いにするのか？　どうすれば、このなすりつけられた罪から逃れられるのか？

広すぎる仮の独房で、そんな事を考えていると、突然ドアが開き、二人の男が入ってきて私の牢屋の前に並んで立った。

一人はスーツを着た冷たい表情の男。もうひとりは、頭をそり上げた、見るからに一癖も二癖もありそうな人物だった。

スーツの男は、入って来るなり書類を取り出し、それを読み上げはじめた。

「財部明（たからべあきら）。あなたは、神崎線大量殺人事件容疑者として逮捕されました。容疑は、九人の無差別殺人と運行妨害による傷害罪です。社会的注目度も高く、容疑者も即日連行されたということで、明日、緊急の裁判が行われます。結審は明日。物的証拠など多数ということで、まず間違いなくあなたが犯人と断定されるでしょう」

裁判が明日だって？　私はまだ自分の弁護士と会ってすらいないのに、どういうわけだ。いや、何より、何故「物的証拠」などがあるのだ。「証拠って何なんですか」と、強い詰問口調で、私は聞いた。

「あなたが神崎線四十三号車の一両目で殺戮を行っているところの映像ですよ。ごらんになりますか？　たまたま乗り合わせた方が、携帯で撮影されていたんです。それから指紋も多数発見されてますし、あなたの血痕も残っていました」

「嘘だ！　そんなものがあるはずがない！」

私は、証拠そのものがでっち上げられているに違いないという確信を持った。映像だって、最近はコンピュータで簡単に作れる時代だ。犯人映像の顔部分を差し替える程度なら、それほど時間はかからないだろう。

「あるはずがないと言われましても、あるものは仕方ない。ともあれ、結審はおそらく死刑で確定と思われます。いまから覚悟しておいてください。こういう事は、早めにお知らせしておいた方が良いかと思いましてね」

死刑。もう、そこまで決まっているのか。

私は、裁判をなんとか戦って無実を勝ち取る方法に頭をめぐらそうとしていたのに、その余裕さえ与えない、ということらしい。これはよほどの「網」であるようだ。

自分の力の及ばない、あまりの罠の大きさに戦う気力も失ってきてしまった。

スーツの男が言葉を切るのを待って、こんどは坊主頭が私に近づいてきた。手近なパイプ椅子を引き寄せて私の前に座り、反古を綴じた手作りのメモ帳をめくりながらこう言った。

「財部明（たからべあきら）。幼少時代の性は古里（こざと）。孤児院『古里苑』出身で、苗字はそこから取ったんですな。小学校から結婚までは吉永明。これは里親の吉永隆文、愛子夫妻との養子縁組によるもの。しかし実際には生活費援助のみの形式的縁組だったようで。で、結婚を機に、奥さんの財部（たからべ）家に養子として入っている。あなた、古里苑にはいまでも『仕送り』をしているそうじゃないですか」と言うとメモから目を離して、私の顔をじっと見つめた。

なんだ？　この男、いったいどういう人間なのだろうか？　と私は無明の闇を見るような気持ちになった。

山品にだって、孤児だった事は伝えたが、「古里苑」の名前までは、話していない。ましてや、「仕送り」のことなど伝えたこともないというのに、何故この坊主頭は世間話をするかのように語れるのか。

私の表情を確かめたあと、坊主頭はゆっくりと話を続けた。

「知ってましたか、財部（たからべ）さん。『古里苑』は経営が切迫してる。あそこの子供達も早急に里親を探さないと路頭に迷うんだ。でも、あんたの『仕送り』程度じゃどうにもならん。どうかね、あんたがその気になりゃ、莫大な匿名の寄付が『古里苑』に届けられるんだがね」

「なんのことだ」と、つい答えてしまう。あまりの用意周到さに怒りよりも底知れぬ恐怖を感じて、体中の血の気が引いてしまっていた。

「なにね、ここに…」と坊主頭はスーツの男の方を見て手を出すと、書類を一枚受け取った。

「サインをしてもらえばいいんですよ。私が犯人ですって内容だ。そうすれば、明日の裁判も滞りなく進む。我々は事をうまく運びたいだけでね」

誰がそんなものにサインなんかするものか！　と、言おうとしたが、どうにもうまく言葉にできなかった。恐怖が私の体をとらえて離さないという事もあったが、どうやらそれだけではないらしい。

「効いてきましたね」とスーツの男が言う。

「ええ。もう、牢屋の中に入っても大丈夫でしょう」と、坊主頭は、牢屋の鍵を開け、机と椅子を牢の中に持ち込んだ。そして、スーツの男に「高沢さんも椅子を持って」と中に招き入れた。

さっきの牛乳か、と今頃になって気付く。意識はさほど朦朧とはしていないのだが、体が言うことをきかない。自白剤のようなものを盛られたに違いない。もう、どうしようもなかった。

「まずネタの刷り込みからですな」と坊主頭が言うと、高山と呼ばれた

スーツの男が、ぐったりとしている私をベッドに座らせ、その前に机をおいて書類を広げた。
「財部(たからべ)さん、これがあなたがやった犯罪だ。よく覚えてくださいよ」というと、書類を読み上げ始める。
「私、財部明(たからべあきら)は四月四日午前十時三十四分、神崎線上り四十三号の一両目で突然薬物による発作におそわれ、近くにいた男性の首を締めて絞殺。事態に驚いた他の乗客が取り押さえようとしてきたので、その数人を次々に殴りつけ、頭部を鉄柱や壁に打ち付ける形で撲殺、同乗していた高校生の剣道部の集団が竹刀を持って牽制しながら近づいて来たので、逃げ場を求めて運転席に乱入。運転手を襲ったが、その乱闘によりマスターコントローラーの操作が異常となり、車両は脱線した。直接殺害は四名、脱線による死亡者五名の計九名の意図的殺人を行い、重軽傷者百二十八名の大事故を起こした。私が、その張本人である」
こんな事故の様子を詳細に書かれた資料がＡ４用紙で３枚。びっしりと書かれた内容を繰り返し私の耳元で読み上げた上で「これをやったのは、あなただ。そうだね」という洗脳を行いはじめた。
私は意識は明確でありながらも、ゆるやかに、その犯罪の犯人が私であるという問いかけを正しく感じ始めていた。それは昔の獣人事件の記憶と今回の事件の洗脳が入り交じった、不思議な感覚だった。
一定の洗脳作業が終わると、仕上げに一問一答で質疑応答があり、事件の内容ひとつひとつについて、「私がやりました」と答えていく作業があった。机の上に、小さなカメラがあり、証拠映像として撮影しているようだった。
最後に、坊主頭が私の手にペンを握らせ、「神崎事件の犯人は私である」という書類にサインをしなさいと促した。
「つい最近、婚姻届にサインをしたんでしょ。その感覚を思い出せばいい。あなたの奥さんにも莫大な遺産が送られるように、手はずは整っていますから。安心なさい」と恐ろしくやさしい、猫なで声でささやいていた。
ひとみ。そうだ、ひとみ。ひとみと話がしたい。そう思ったが、自分の意志では言葉を発する事もできなかった。
何が起こっているのか、どんな卑劣な作業が行われているのか、全ては自覚的に理解できていた。だが、どうしても思い通りの発言や行動ができ

ないのだ。まるで拘束衣を着せられているかのような息苦しさだ。
そのもどかしさ、苦しさに、わずかに表情が歪むが、ただそれだけの事だった。私の右手は、私の思いに逆らって、地獄への契約書に財部明（たからべあきら）とはっきりとサインしていた。
「よし、これで全て整った。首相と甲本長官に来ていただきましょう」と坊主頭が言う。
「ええ」とスーツ姿が電話をかける。
首相？　なんだそれは？
「あんな事故が起きて、隠蔽作業がおじゃんになるところでした。しかし、いや、うまく孤児院出身者が見つかったもんだ。最初は山品を犯人に、と思ってたんですがね。あいつだと、こううまくはいかんかったでしょう。高沢さん、あんたのシナリオも抜群だ」
そうか、山品の代役だったのか。そう気付くのがやっとだった。
「あんた、あまりしゃべりなさるな。この財部（たからべ）さん、意識はちゃんとあるんですよ。ただ薬でいいなりになってるだけだ」
「おっと。そうですな」
そんな会話を二人が交わしていると、やがてドアが開いて二人の人間が入って来た。
はじめに入ってきたのは警察の、ずいぶんと位の高そうな制服を着た、小柄だが恰幅の良い中年男であり、その後について入ってきたのは、驚くべき事に、この国の首相である、山形龍之介その人だった。
首相と長官らしき警官は、高沢と呼ばれたスーツの男に促されて、私の牢屋の前に並んで立った。牢屋に入った私の姿を背景にして、握手をする。そしてその二人の姿を高沢がフラッシュをたきながら、何枚も写真に撮っていた。
鉄格子の向こうから、私の顔をのぞいていた時の山形首相は、苦虫をかみつぶしたような不満げな表情だったのだが、おそらく握手の写真では満面の笑みをたたえているのだろう。こちらからでは、首相の顔は見えないが。
「明日の朝刊かね」と、首相はぼそりとつぶやいた。
「はい、そうです。おそらくは一面にでかでかと掲載されることでしょう」
首相は無言でうなづくと、私の方に向き直り、「君には本当に済まない

と思っている。許してくれたまえ」と言った。
テレビで見る二枚目で、論理明晰に語る、国民的人気首相というイメージではなかった。撮影用になでつけられた七三分けの黒髪は、おそらく染めているに違いない。彼の表情には、私以上に「逃げられない罠」にはまってしまった苦しさが見て取れた。
「君に過酷な運命を押しつけて、理由すら言えない、この状況を私自身、恨みに思う。だがしかし、この国の未来と、平和のために死ぬのだと思って欲しい。できるだけの事はさせてもらう」
何が「できるだけの事だ」と、私は怒りがより一層大きくなった。何か一言、言い放ってやりたかったが、私の口はすでに私のものではなかった。
山形首相はため息のように、ひとつ深く息を吸うと、「彼は、この後どうなるのかね」と高沢に聞いた。
「証拠固めは、ほぼ完璧に済みました。書類上は明後日の死刑執行となっておりますが、実際には今からすぐに執行です。早い方が足がつきませんし」
私は絶望的な気持ちになった。もう、いますぐに殺されるということではないか。だからこそ、私を薬漬けにしたのか。
「血液採取、検死などの証拠作成は甲本長官の方で処理いただけます。裁判もあくまで便宜上のものです。あとは書類送致だけです」
血痕などの証拠も、私の体から採取した上で捏造するという事のようだ。なぜこんな事になってしまったのか。いくら悔しくても、体を動かすことすら出来ない自分にいらだちがよりいっそう募った。
「それで、死刑は麻酔執行だね」と、山形首相は高沢に確認をした。
「そうですね。昨年十一月からは、麻酔執行に移行しております。いったん麻酔をし、それから天昇拘置所の刑場に送られ執行です」
「苦しまずに逝ける。せめてそれだけが救いか。では、もう彼に麻酔を。はやく楽にしてやって欲しい。私も見ているのが辛いのだ」
なんだと？　ここで意識を失って、もうその先に人生はないと言うのか？　それは、麻酔すなわち、死、という事ではないか。
自由に動かない体で、なんとか逃げ出せないかともがいたが、体はピクリとも動かなかった。いまがまさに死体と同じ状態なのに、それでも殺されるのはもっと大きな恐怖だった。

せめて、大声で叫んで助けを求めたかったが、それもかなわない。どうして、こんな場所に連れてこられたのだろう。最初の最初から、罠だったんじゃないか。その計画の用意周到さに憎しみを感じ、そんな罠に気付くことなくはめられてしまった、自分の愚かさに自己嫌悪を感じた。しかし、そんな反省もまた、すでに手遅れだった。

「では、さっそく」とスーツの高沢が私に近づいて来て、私のシャツの腕をまくりあげた。

床に置いてあった黒い鞄から、何かを取り出す。注射器だ。もう、私の命もない。助けてくれ！　心の中では大声で叫んでいたが、私の心のあがきなど、存在しないかのような静けさだった。私は表情すら変わっていないのだろう。ただ、目だけが開かれている。高沢は、アンプルから薬品を注射器に吸い上げた。

その時だった。この小さな拘置所のドアをけたたましく叩く音が、地下室いっぱいに響いた。

「山形首相！　首相！　緊急で連絡が入っております。ドアをお開けください。首相に荷物が届いております」

どうしたんだ？　という表情で、高沢の手が止まる。その手には注射器の針が光っている。

「あの声は吉住だ。開けてやってくれ」と山形首相はドアのそばにいた、甲本所長に促した。ドアが開くと、小柄で妙に格式ばった制服の初老の老人が立っていた。首相の秘書なのだろうか？　その首元の蝶ネクタイが、このカビ臭い空間にはあまりに不似合いだった。

「どうしても首相にお知らせしないといけない連絡が参りまして。こちらです」と、黒い小ぶりのアタッシェケースを差し出した。

山形首相は、そのスラリとした長い足でドアまで近づくとアタッシェケースを受取り、鉄格子の横に置かれた古い事務机まで運んだ。鞄は、ちょうど私の目の前の位置で開かれる事になった。

アタッシェケースには、満杯の札束が入っていた。

「吉住。これは、どういう事だね」と、山形首相が問いかけた。

「どなたかは不明なのですが、冤罪実態調査会と名乗る方からそのアタッシェが届き、『死刑代執行』の特別枠のＡ級令をいただきたい、というお電話がございました」と小柄な老人は、私にはわからない言葉を述べ立てた。

朦朧とした私の意識では事のつながりすら、まったく想像がつかなかった。しかし、甲本長官は、激しく動揺していた。
「冤実調(えんじつちょう)だと？　どうしてそんな所に漏れたんだ。いくらなんでも、それはまずい」甲本長官は、この世の終りが来たかのように取り乱していた。
「甲本さん。あわてちゃいけない。これは冤実調からの賄賂だよ。つまり『取引』だ。カードはこっち側にあるんですよ」と山形首相は落ち着いて甲本をなだめた。
「で、他に要望はあったのかね」と山形首相は吉住と呼ばれた老人に再度問い質した。
「いえ、あちらのご要望は『死刑代執行』の特別命令のみでした。今回はそれだけで引き下がる、とおっしゃっておられました」
「ふん。いい判断だな。これであちらも、ある意味同じ穴のムジナだ。いいだろう。死刑執行は冤実調預かりだ。彼らにまかせればいい」
吉住にそう言った後、山形首相は私に近づいてきて、顔を覗き込み、こう言った。
「あんた、命拾いしたね。どういう事かわからんだろうが、とにかく命だけは助かったんだ。どこの誰が、どう動いたのかわからんし、今後の君の人生がどうなるかも私は知らん。しかし、とにかく命だけは助かった。安心したまえ」とにやりと笑う。
どんな取引が行われ、どう「助かった」のかすら、私には分かりようがなかった。自分の意思で動く事も出来ず、自分の命も自分で救う事が出来ないのだ。自分の置かれた状況さえわからない私には、安心などなかった。ただ、混迷と困惑の海に投げ出されているだけなのだ。
私のわずかな戸惑いの表情を見て取ったのか、山形首相は、高沢の方を向いて「麻酔して差し上げなさい。後は吉住が引き受けてくれる」と指示を出した。
「待ってください、それは死刑執行権だけが冤実調に移って、その他の計画は予定通り、という理解でよろしいですか？」と高沢が確認する。
「もちろんだ」という山形首相の返事を聞いて、高沢は安心したように、私の腕に注射の針をぷすりと刺した。
麻酔は強力で打たれてすぐに、私は意識すら失った。山品と旅行に出て以来、もうずっと私に自由はなかった。思い通りになる事も一度もなかった。

私は、このまま意識を失って死んでしまうのか、それとも目覚める事があるのか？　それすらも、もう私の意識と意思と能力では予想する事すら不能だった。
ただ、長い眠りの始まりだという覚悟だけはあった。

■８　天昇市鉄道病院個室２３８号

長い眠りだった。何度か目覚めたような気もするが、それが現実だったのか夢だったのかも覚えていない。
目を開けると、そこには懐かしい、妻、ひとみの顔があった。
「明さん！　目を覚ましたのね！　良かった」
こぼれんばかりの笑みを浮かべたひとみの顔が、私の目の前にあった。
そうか、死刑にはならずに済んだんだ。
私は、やっとそのことだけを理解した。ひとみとまた会えたのなら、こんなにほっとすることはない。ただ助かったという事だけが心に染みいるようにうれしかった。
「目を覚ましたの？　そうなの？」と横から別の女性の声が聞こえた。あの声はあかねさんだと気付いて、そちらを見ようとすると、首がうまく曲げられず、視界も布のようなものでふさがれてしまった。
「ああ、無理しちゃだめ。まだ包帯が取れてないんだから」とひとみが私を制した。
「かなり強い薬を打たれてたしね。けっこう危険な状態だったのよ。点滴したり、手術したり、いろいろ…包帯だらけなの。動かない方がいいわ」
とお義姉（ねえ）さんが状態を説明してくれた。
「昨日の神崎線の事故のすぐ後に、署内に『特別参考資料』が出回ってね。公安からの資料だ、というふれこみだったけど、その中に、あなたの名前があることを知って驚いたわ」と事の経緯やいきさつを教えてくれる。
あかねさんは、資料を見てすぐ、直属の上司を通じて、逮捕状況の確認をしてくれたらしい。
「聖夜号には、犯人追跡のために機捜の、あ、機動捜査隊ね、その警官や刑事も多く乗ってたから、暗号の意味も含めて『トンネル通過中』とか車内放送にかこつけて連絡してたのよ。山品さんも一緒って聞いてたし、あ

の人なら暗号にも気付くかもと思って」
ああ、そうか。あの緊迫した車内放送は、そんな意味があったのか、と私は思う。
「じゃあ、あの『レスキュー隊が出た』とかいう案内も？」
と、口にしてみたものの、口の筋肉が引きつったように動きにくい。言葉が、口の中でこもったような音になってしまう。
だが、それでも、なんとかしゃべれることが、生きている実感につながっていた。長い眠りに落ちる前の、体の自由も利かない状態とはまったく違う。妙な筋肉のこわばりですら、自分の体を感じ取れる「喜び」だった。
「レスキュー隊は、冤実調（えんじつちょう）の意味よ。『冤罪実態調査会』ね。そこが動き出したって知らせたわけ。犯人追跡中の機捜隊員にはある程度わかったはずよ。彼らからの報告も、途中から少しニュアンスが変わってきたわ」
冤実調（えんじつちょう）というのは、簡単に言えば、現場の警官が警察庁幹部の不正を監視するために作られた匿名制の内部告発組織なのだそうだ。数年前から警察署内で出所のよく分からない証拠品が出現しはじめたことがきっかけに作られた制度らしい。非公式・非公開だそうだが、省庁内規律を正す意味では少しずつ機能し始めているところだという。
私は、やっとあたりを見回す余裕が生まれ、自分が大きな病院のベッドに寝かされている事が分かった。窓から、何本もの線路が見えた。どうやら駅ビルの中にある病院であるらしい。列車の列を見て急に、私は自分の境遇の事が気にかかってきた。
「ところで、事件はどうなったんですか」と私が問うと、「まずは、これを見る事だわ」と、あかねさんが新聞を私の目の前に広げた。
そこには牢屋に入れられた私の前で、首相と警察庁長官が握手している写真が大きく掲載されていた。
「神崎線事故犯人即日逮捕」
「首相特別指令で警察庁迅速解決」
という文字が躍っていた。
「いまのが二面。一面の記事はこれ」と義姉（あね）が見せてくれた紙面には神崎線脱線事故現場の航空写真が大きく掲載され、その下には私の顔写真が「犯人　財部明（たからべあきら）（三十六）」という名前とともに明示されていた。
「どういう事なんですか！　僕はまだ犯人のままだ」

動揺する私に義姉(あね)は、
「ごめんなさい。いまの私達には、あなたの命を救うだけで精一杯だったの。詳しくは知らないのだけれど、とにかく犯人は財部明。そして、あなたの命だけは助かったってこと」と歯切れの悪い言い方をした。
「それは、どういうことなんですか？」
「あなたはもう、財部明として生きていくことはできないの。ごめんなさい。私たちにできるのはそこまでだったわ。あなたの命を救うのがやっとだったの」
あかねさんの重苦しい言葉から、何か裏事情があることを感じ取った。
「あなたは今日から等々力恭一という名前で生きてください。戸籍その他も冤実調が、ネットワークをフルに使って『捏造』してくれたわ。これが限界だったの。許して」とあかねさんは、実にくやしそうに、振り絞るように言った。
つまり、こういうことだ。神埼線の犯人は財部明。そして即日裁判で犯人として断定され、明日死刑が執行され、この世から私の存在は消える。
ただし、それは書類上の事であって、実際には、私は、新しい戸籍と新しい職場、新しい人生を与えられて、新たに生きていけるということだったのだ。冤実調は、首相に脅しをかけつつ、それでも、私の命を救うために、大きな不正には目をつぶったのだ。
「だからね、明さん。あなたの顔に包帯が巻かれているのは…」と、あかねさんは申し訳なさそうに何かを言いかけた。
でも私はそれをさえぎってこう言った。
「顔を整形したんでしょ。わかりましたよ、そのくらいのことは。でも気にしないでください、あかねさん。僕はもともと孤児です。いつも、毎日のように、新しい人生を選び取って生きてきたんです。それに、ひとみと、新しい人生を始めたところです。彼女さえいてくれれば、新しい人生も苦しくはない」と私は言った。あの押しつぶされたような列車の牢獄に比べれば、ひとみが横にいる、いまの環境がどれほど素晴らしいか。私に不服はまったくなかった。
「でも、明さん」
と、急にひとみが横から話しかけてきた。
「あなたはすでに書類上は死んでるから、私とは死別、ということになるのよ。あと何ヶ月かして、住む場所も決まったら、改めて等々力ひとみと

して、あなたと再婚しなきゃならないわ」と、やわらかく笑いながらひとみは言った。
「ははは。そうか。そうなるのか。いいじゃないか。それも新しい人生さ」と私も笑い返した。
警察内部の不正も、闇にうずまく犯罪も、いまの私にはどうでも良かった。ただ、目の前の小さな幸せが、壊されずにあること。それだけが大切だったのだ。

■9　南新州　万鴈線ルーラルライナー「やまざき」

それから四年が過ぎた。
私は住処を南新州に移し、小さな消費者金融の会社に勤めた。会社の仲間達は、互いの過去を根掘り葉掘りは問わず、ただ明日のゆくえを大切に生きていた。
今日は会社の十周年で、社員有志で旅行に出かける、集合の日だった。改めて等々力恭一として戸籍を得た後に「再婚」した、ひとみも一緒である。
「こんな日が来るなんて、夢のようね」
「そうだな。天昇の鉄道病院で再会してから、本当に新しい人生になったからな」と、私は、四年前を懐かしく思いながら、二人分の周遊切符の列車番号を確かめていた。
「えーと、こっちのホームだな。行こう」
ひとみを促し、ホームに続く階段を上ろうとすると、そこに案内役だろうか？　少しデザインの違った制服の駅員がいて、私達に話しかけてきた。
「『やまざき』ご利用のお客さまですか？」
「ええ、そうですけど」と私が答えると、「申し訳ありません。運行の遅れが出ておりまして、次の『やまざき』は、隣のホームから出ることになっております。移動していただけますか」と案内された。
言われた通り隣のホームへ移動すると、すぐに発射のベルが鳴った。
「え？　もう発射の時刻だったか？」とは思ったが、ホームにいた車掌とおぼしき人物から「『やまざき』ご乗車の方は、お急ぎください、本日は臨時時刻表で運行しております」と急かされ、私とひとみは、最後部の車

両にあわてて乗車した。
「河瀬さんたちとは、電車の中で待ち合わせ？」とひとみが聞いてきた。
「そうなんだけど、見かけないよね」
列車の番号を確認すると、同じ「やまざき」でも、周遊切符には７８８号と書かれており、この「やまざき」はどうやら４号であるようだった。
「あー、列車を間違えちゃったよ」私はひとみに説明し、あわてて携帯電話で、会社の同僚である河瀬に連絡を取った。
「なんだって？　そうか。それじゃしょうがないな。でも、お前達、どうせ二日目からは俺達と分かれる予定だったろ？　新婚旅行がわりの南新州旅行にするって話だったじゃないか？　合流の時間も無駄だし、そのまま行ったらどうだ？　その周遊券は、そのあたり融通が利くぜ」
ざっくばらんな河瀬はそう提案してきた。
「ああ、じゃあ、そうするか。みんなとの旅行は、またの機会にしよう」
そうするのがいいよ、という河瀬の返事を聞いて、私はひとみの元に戻り、事情を話した。
「そうね。それがいいかも。だって、この四年、本当に落ち着いてゆっくりできた事ってなかったものね」とひとみも賛成する。
私達は、手近な席に座ると荷物を網棚に載せた。座席は指定席のようだった。
「あらためて座席の指定をしてもらわないといけないわね。車掌さん、どこかしら。んー、何か飲み物も欲しいし、ちょっと探してくるわ」と、ひとみは座席を立った。
私は、車両から出て行くひとみを見ながら、やっと、ごく当たり前のように、自分達の幸せを実感できることを、改めて感謝していた。
財部明という私の歴史を捨て、等々力恭一としての平和で暖かい時間をやっと手に入れたのだ。
その時、何人かの背広姿の人間が、私の座席の近くに一斉に座った。団体旅行客のように、はしゃいだ会話もなく、妙に落ち着いた動きが、異様な雰囲気をかもしだしており、私は急に不安な気持ちになった。
なぜか小柄な老人が私の隣の座席に座った。私は、「そこには妻がおりますので」と断ろうとしたが、老人は低い声で、
「お久しぶりでございます。財部明（たからべあきら）さま」と、口にしてもらいたくない私の本当の名前を呼んだ。

あわてて、横に座った老人の顔を見ると、それはあの「吉住」と呼ばれた山形首相の秘書らしき人物だった。
「お探しいたしましたよ。ほんとうに」といやらしく笑う。
あの時は、意識も朦朧としていたので気づかなかったが、この老人も、あの坊主頭と同じく、一癖も二癖もある、裏のありそうな人物だった。これだけ近くから表情をつぶさに見ると、それが良くわかった。
「まさか、こんな田舎に潜伏されているとはね。でも…」と吉住はもったいぶって一息おくと、「隠れるならもっと上手に隠れてもらわないと困るんですよ。冤実調(えんじつちょう)も仕事が荒い」と少し怒ったような口調ですごんだ。
私は、はっと思い直し、
「い、いや、私は等々力(とどろき)ですよ、何の話をしてるんですか？」とあわてて財部であることを否定した。
「ごまかしなさんな。うまく整形されとりますが、私にだってあんたが財部(たからべ)さんということくらいわかりますよ」
と言うが早いか、吉住は私の首筋に細い針を差し込んだ。抵抗する間もなく、何か薬が体の中に入り込み、鈍い痛みが左半身に広がっていった。
「あんたが生きてちゃまずい事になってきたんですよ。なので、また麻酔を打たせてもらいましたよ。ただし、今度は致死量を越えてますがね。人間、そう何度も死ぬ事たぁできないんですよ」と、吉住は意地の悪い表情で冷酷に事実を言い放った。
私の左半身はすでに完全に麻痺していた。
「ど、どうしてこんな事を。もう、いいだろ」と文句を言うのが精一杯だった。
「どうして？　ふん。もう、死んでしまうんだ。教えてもいいでしょう。実はね、あんたの存在がマスコミにかぎつけられましてね。まぁ、民生党の相馬さんあたりが裏で糸引いてるんでしょうが。『死刑代執行』自体が政治問題化しそうなんですよ。あんな裏取引が表ざたになると、かなり問題なんですよ。そうなれば、我々の政権の命取りでね」
政権の命取り？　そんな事のために。私は悔しい気持ちでいっぱいだった。
たかが政権など、私の小さな幸せを踏みにじってまで維持せねばならないものなのか。そんなもの、私の知った事ではない。
しかもお前達は、財部明と等々力恭一と、二度も私の自由を奪ったでは

ないか。
どうしてそこまでまとわりついてくる。もう、ほうっておいてくれ。
左半身のみならず、右半身にも麻痺は広がっていった。もう、私は死ぬ。人生も終わりだ。こんなところが終着駅だったなんて、と悔しさがこみ上げてきたが、「悔しさ」という感情すら、もう、どんなものだったのか、わからなくなっていた。

■10　終着駅　山取終駅（やまとばて）

意識が無くなろうとする寸前、猛烈な吐き気が私を襲った。胸の奥から、喉元にかけて、焼けるように熱い、何かがこみ上げている。
全身の血が逆流し、脳の血管が切れてしまうのではないか？　と思うほど、激しく体が反応している。しかし、体全体が麻痺していて、ピクリと動かす事すら出来なかった。
思い通りにならない悔しさと、「死にたくない」という思いが、生きる力すら身につけていない、幼児の頃の不安感と酷似していた。
幼く力のなかったあの頃と。
そんな感情と、体のすべての感覚がシェイクされ、複雑に繋ぎ合ってモザイク状に結晶した。
行き場の決めつけられた、人生というレールの上で、自由に生きたいという野生の魂が、幾度も幾度も、揺り起こされている。
お前は誰だ？
私は野生の魂だ。
誰がお前を、想いもせぬ処へ運ぶ？
この列車だ。
この動かせない鉄のレールだ。
ならば、崩せ。
打ち崩せ。
お前にはその力がある。
お前にはその資格があるのだ。
その腕をふるうが良い。
その牙をむくが良い。
血がたぎった。

その瞬間、私の麻痺していた全身に強烈な痛みが蘇り、細胞が活性化した。

死なない。ここで眠りはしない。筋肉が急激に隆起した。血管が膨れ上がる。

吐き気ははっきりとした嘔吐物となって、胃の奥から湧き上がり、口からは大量の吐瀉物が流れ落ちた。唇からしたたり落ちる感覚が妙に明晰だった。

隣で吉住が、驚いたような表情で見ている。この麻酔注射で、こんな反応が出た事などないのだろう。

整形した顔の傷痕の隙間がかゆい。手を顔に近づけると、妙に伸びた爪が顔面の皮膚を掻きむしる。皮膚は剥がれ落ち、そこから太い髭が生えてきている。

そうか。

その毛に触れた途端、私は全てを思い出した。その昔、私がまだ幼かった時にも、これと同じ事はあった。列車の揺れと、顔の剛毛と、長く鋭い爪。

私は正真正銘の「獣人」だったのだ。少年のあの日、単に暴れまわっただけではなかった。獣人の姿に変身して、人とは思えない超人的な力で、周りの乗客を皆殺しにしていたのだ。

倉庫のような護送車の中で、何人もの職員が幼い私の周りにいた。私は小さな檻の中に入れられていたが、電車の揺れによる意識への刺激で、精神の凶暴化が始まってしまった。

「なぜ、僕を閉じ込める！」

「どうして、どこかに連れ去ろうとするんだ！」

「僕はただ、自由に生きたいだけだ！」

「邪魔をするな！」

「邪魔する奴はどっかへ行っちまえ！」

ただそれだけの思いで、幼い私は檻を破り、すべての職員を叩き殺し、貨物車両を改造した「護送車」から逃げ出した。

隣の客車に、あの孤児院の、優しかった女の先生がいた。そしてあの記憶の中の戦慄の表情は、私が彼女を凶暴な牙でかみ殺した時の表情だった。

気がつくと、私は、幼い頃の獣人化した姿より、はるかに大きな体の獣

人として、列車の車両内に立ち上がっていた。
着ていた服は破れ、身体中に生えた獣の毛がむき出しだった。
隣に座っていた吉住は、私の姿にあわてて逃げようとしたのか、狭い通路に仰向けに倒れ、恐怖の表情で私を見上げている。
恐ろしいか。
いいだろう。私はお前に、もっと恐ろしい目にあわされたのだ。お前にも恐怖をお返ししてやろう。
私は吉住の薄く白くなった頭を片手で掴むと、そのまま空中に吊り下げた。情けないほど、哀れな表情で私を見ていた。
あたりを見回すと、先ほどの背広姿の集団が、様子をうかがうように、こちらを見ていた。
私は吉住に目を戻すと、その喉に噛みつき、容赦なく噛みちぎった。血の味が、舌にまとわりつく。吉住はぐたりとなって息絶えた。
その状況を見た途端、背広の男達は、一斉に逃げようと通路に出た。しかしあわてていて、足元もおぼつかない。
私は座席の背もたれに飛び乗ると、背もたれから背もたれへ、走るかのように彼らを追いかけ、両手で二人ほどの頭を掴み、そのまま振り回した。大人一人の体重など、いまの私には猫一匹と変わらない。
が、手にした人間の顔をよくよく見れば、一人はあの坊主頭ではないか。
「ふん。お前か。死ね」と、私は坊主頭の頭蓋骨を網棚の金属棒に手加減なしにぶつける。グシャ、という音がした。頭がつぶれたのだろう。だが、知った事ではない。そのまま、列車の窓をヒジで破ると、ゴミを捨てるかのように、坊主頭の体ごと、列車の外へほおりだす。高速で迫っていた鉄柱に坊主頭の体はぶつかり、あらぬ方向に飛んで行った。叫んでいるヒマもなかっただろう。
ふと見ると、逃げ遅れた人間の中に、あのスーツ姿の高沢もいた。私は深くしゃがみこむと、一気に高沢のすぐ横までジャンプした。体は軽い。身体能力が信じられないほど上がっているらしい。
高沢は、失禁していた。
私は、高沢に顔を近づけると「怖いか？」と聞いた。いや、そのつもりだったが、言葉にはならなかった。すでに、私の口は、犬や狼のように、鼻とともに長く伸びていて、人間の言葉を発する事が出来なかったのだ。

力を込めて、高沢の横っ面を殴り飛ばすと、私の指先に生えていた長い爪が、そのままブスリと高沢の脳みそに刺さった。もう意識もあるまい。

よく見ると、その横でうずくまっている黒い背広の男は山形首相だった。脂汗を流しながら、ずり下がったサングラスから、私を見上げた。頭を掴んで持ち上げたが、山形は死を覚悟したのか、恐怖の表情のまま、静かに目をつぶった。死を受け入れたらしい。

ふん。考えてみれば、この男が私の死刑を「代執行」扱いにすると判断したのだ。良くも悪くも、私の等々力恭一としての再出発はその判断の結果だ。そう思うと、少し殺すのはためらわれた。窒息寸前まで首を締め上げたが、そのままそこに投げ下ろす。

その時、一発の銃声が聞こえた。私の腕をかすめて銃弾が飛び去っていった。

音のした方向を見ると、誰かが私に銃口を向けていた。よく見ると、この「やまびこ」に私を案内したあの車掌ではないか。隣には階段下で出会った車掌もいる。そうか、お前たちもグルだったのか。

私はまた、怒りが急速に大きくなっていくのを感じた。

お前も、そいつも仲間か。

私を、拘束する不実な奴らか。

ただ「静かに生きる」という小さな幸せの素晴らしさも考えず、命令されれば機械のように、言われたままに行動し、小さな人間の生を平気で拘束する、自分の意志で動くこともできない、そんな生きる屍か。

屍ならば、死ねば良かろう。私がお前達に生の大切さを教えてやる。

いつだって、生を怖がるものが、私を縛るのだ。恐怖を見れば恐怖は終わる。だから、お前達が一番恐れている物を、いまここで見せてやる。

そこからの記憶は途切れたが、気がつくと、あたりは血の海、屍の山だった。

列車はすでに停車して、乗客が次々にホームへと逃げ出していた。駅名の看板には、山取終という文字が見えた。普段なら急行も止まらない小さな駅なのだろう。私の凶行を知って、緊急停止をしたに違いなかった。

しかし、私の精神は暴走したままだった。

何故止まる。

何故、進む事を邪魔するのだ。

私の人生を停止させるのなら、邪魔者は排除する。

列車を降りて、ホームへ逃げ惑う人の群れ。
あの中にはまだ、「私」を縛る、愚かな者が大勢いる。奴らは小蠅のように次々と現れる。とどめを刺さなければ、私の「生」がおびやかされる。
私は生きるのだ。進むのだ。
私は列車の窓を破って、ホームへ飛び出す。
逃げる人間を次々に捕まえては、体を引き裂く。かみ殺しては、横へ投げ捨てる。「私」を縛っているのはお前だろう！
だが、私を恐れ、逃げ惑い、改札口へ一目散に走る人の波の中で、ただ一人、逃げる事なく、私の方を向き、私を待つかのように立っている人影があった。
あれは誰だ？
私はその人物に近づいた。見た事のある顔。そうだ。ひとみだ。ひとみ。僕だよ、明だよ。と言おうとしたが、口からはウォーンといういい遠吠えしか出なかった。
私はスピードを落とし、ゆっくりとひとみに近づき、向き合って顔を見つめた。
ひとみは、「明さん、とうとう蘇ってしまったのね」と言うと、胸ポケットから、何かを取り出し、私の胸にあてた。
ガスッという鈍い音がして、私の胸に銀色の光が放たれた。ひとみの手にはスタンガンのような、見た事もない武器が握られていた。
とたんに、私は身体中にたぎっていた野生の血が潮が引くように体から去って行くのを感じた。体温がどんどん冷えて行っているという感覚があった。おそらく、もう命はないのだろうと、直感した。
ひとみの目には涙があふれていた。
「ごめんなさい明さん。こうするしかなかったの。獣人の心が蘇ったら、もう、こうするしかなかったのよ」
私はどういう事か知りたかった。「どうして？」と、ひとみに問いかけようとしたが、口元はまだ獣のままだ。言葉を発する事ができない。ただ悲しく、ひとみを見つめるだけだった。
だが、ひとみは、その表情を読み取ってくれたのだろう。死に行く私に語りかけていた。
「あなたは、生まれた時から、獣人兵士の人体実験を受けた子どもだった

のよ。だから、ずっとあなたには見張りがついていた。私もその見張りの一人」

そうか、そういう事だったのか。私は妙に納得していた。

「でもね、私は、心からあなたの事を好きだったのよ。わかって。だから結婚したの。その気持ちは本当よ」

わかってるよ、ひとみ。それはわかってるんだ。もう言わなくてもいい。そう言いたかったが、やはり、口元は獣のままだ。悲しくウォォンと声を出すのが精一杯だった。

「ごめんなさい。ごめんなさい、明さん。だからもう、人間の姿に戻って。いつもの明さんの顔に。もう、怒らなくていいのよ。私に優しい明さんの顔を見せて。ねぇ、お願い」

ひとみの、その言葉を聞きながら、私は思っていた。

違うんだ、ひとみ。それは違うんだよ。私の本当の顔は、この獣人の顔なんだ。人は誰でも獣の心を持っている。その獣の心からは逃げられないんだよ。

自分を恐れて、自分を生きる事はできない。逃げられない運命のレールの上で、獣人であることを受け入れて精一杯生きるしかないんだよ。

そう言葉にならない唸り声でひとみに伝えて、私の命は終わりを告げた。

〈了〉